

## オペレーション・カードの説明

番号	タイトル	説明
1	危殆化された公文書 [Dispatches Compromised]	電信の発達にもかかわらず、多数の公文書がいまだに「伝令」や伝書鳩によって運ばれていたため、危険性は常にありました。敵の計画公文書の捕獲は、何倍もの援軍に匹敵しました。
2	宣戦布告 [Declaration of War]	1864年のデンマーク戦争以来、オーストリアとプロイセン間で外交関係の決裂がエスカレートする一方、どちらの勢力も先に宣戦布告する責任を負うことを嫌いました。ビスマルクは、オーストリアが先に宣戦布告するよう画策し、ドイツ諸邦と欧州共同体から外交上のポイントを獲得しました。
3	エルベ流域軍 [Army of the Elbe]	プロイセン軍第Ⅶ軍団の軍団幕僚と師団の周辺に創設されました。これらの構成部隊はフォン・ビッテンフェルト（第8軍団司令官）の指揮下にある3個歩兵師団の小規模な軍を編成するため、第Ⅶ軍団の第14歩兵師団と組み合わせられました。軍団司令部は本質的に活動を停止し、全3個歩兵師団は軍司令部に直属しました。エルベ流域軍は、ザクセンの中央と東の部分で活動し、ボヘミアで活動中はプロイセン第1軍の右に位置しました。
4	マイン流域軍 [Army of the Main]	プロイセン軍第Ⅶ軍団の軍団幕僚と第13歩兵師団の周辺に創設されました。3個の追加歩兵師団が組み合わせられ、これらの構成部隊はフォン・ファルケンスタイン（第Ⅶ軍団司令官）の指揮下にある3個歩兵師団の小規模な軍を編成するため統合されました。2個の追加歩兵師団が組み合わせられて（又は合成）、フォン・マントイフェル指揮下のSchleswig師団（戦前のデンマークのシュレスヴィヒ地方守備隊）、戦前の連邦のMainz要塞のプロイセン軍守備隊、プロイセンのライン地方内の種々雑多な部隊から構成されました。軍団司令部は本質的に活動を停止し、全3個歩兵師団は軍司令部に直属しました。マイン流域軍は、ハノーヴァー、ヘッセン、南ドイツの地域で活動しました。
5	カリック旅団 [Brigade Kalik]	旧デンマークのホルシュタイン地方の守備隊です。開戦と同時に、この旅団はホルシュタインを出発してボヘミアのオーストリア第Ⅰ軍団に合流しました。この旅団は、北ドイツに留まってハノーヴァー軍を支援できました。
6、7	野戦塹壕 [Field Entrenchments]	近代戦における生存性を向上させるために使用された野戦塹壕（たとえ向上していなくても）で、攻撃部隊に対する戦闘を制限する役目を果たしました。ただし、これらは普墺戦争で頻繁に使用されませんでした。注目すべき例外は、ケーニヒグレーツ（Sadowa）の戦いでオーストリア軍によって使用されたものです。プロイセン軍の速射「短針銃」によって広範囲に及んだ国境線に沿った緒戦におけるオーストリアの敗北後、ベネデクはBistritz川沿いとChlum大地周辺に広大な野戦塹壕を命じました。これらは、一部のオーストリア軍団による無許可の撤収を通して危うくされるまで、非常に有効であることが証明されました。
8	モルトケ [Moltke]	統一戦争におけるプロイセン軍勝利の立役者として広く知られるモルトケは、実際には積極的に戦争の指揮を執っていませんでしたが、参謀総長の地位にありました。彼の主要な役割は、ヴィルヘルム王の主要な軍事顧問としての任務と併せた、計画と調整でした。このカードは、第1軍と第2軍の作戦調整者としての役割と、その結果としてのケーニヒグレーツ攻撃の成功を反映しています。
9	土壇場の和平提唱 [Last Minute Peace Initiative]	実際の宣戦布告に至るまでに、平和的解決が模索されました。これは結果として長期の散発的な動員期間が生じさせ、非常に現実的な紛争の和平的解決がビスマルクのオーストリアとの戦争計画を台無しにする恐れがありました。どちらの陣営も、平和を破る責任を負うことを欲せず、戦争を開始できる前に和平交渉を進めなければなりませんでした。
10	砲兵予備 [Artillery Reserve]	オーストリア軍のライフル砲兵は、いまだ後装式ではなく前装式でしたが、プロイセン軍の新型クルップ後装砲よりも優れた性能を発揮しました。オーストリア軍の砲兵予備は、ケーニヒグレーツでオーストリア軍が敗北した後の脱出成功に大きな貢献をしました。

番号	タイトル	説明
11、50	オーストリア軍の突撃戦術 [Austrian Stosstaktik]	1859年の仏墺戦争における敗北から誤った結論が導かれ、オーストリア軍はその戦術を火力ではなく突撃に変更しました。プロイセン軍の短針銃に対する密集隊列での攻撃は滅多に成功せず、甚大な死傷者を出しました。
12、52	砲声 [Sound of the Guns]	命令がなくても自ら積極的に演じるよう訓練されたプロイセン軍上級司令官たちは、作戦実施中に「砲声に向かって行軍する」ことを期待させていました。
13	潰走 [Rout]	戦場では稀に、敗北して士気阻喪した軍が恐慌状態に襲われ、戦闘の潜在的な死傷者を増加させる可能性があります。
14	騎兵の犠牲的行為 [Death Ride]	オーストリア軍予備重騎兵師団は、ナポレオン戦争時代からの伝統で、混乱して打ち負かされた敵に対して打撃を与える任務が与えられていました。これは、近代的な後装式ライフルに対して実用的でないことが判明しました。ただし、ケーニヒグレーツで第3予備騎兵師団の重騎兵は、プロイセン第1軍とエルベ軍によるオーストリア軍南翼への側面攻撃を妨げるため、自らを犠牲にしました。その行動は、ボヘミアで敗北した北方軍を保全するオーストリア軍砲兵の活動を補完しました。
15	不満民族 [Disaffected Nationality]	オーストリアは、少数民族を首尾よく統治していく上で、深刻な問題を抱えていました。クロアチア人やポーランド人など、ハンガリー人のごとく極端に忠実な民族もいましたが、チェコ人やイタリア人は戦闘中に崩壊することで有名でした。
16	命令誤伝 [Garbled Orders]	19世紀に通信が進歩したにもかかわらず、戦役では常に問題でした。
17	南方軍予備師団 [Sud-Armee Reserve Division]	イタリア地方のオーストリア軍要塞の守備隊から編制された師団で、オーストリア南方軍の統率下で従軍しました。
18	隠れた浅瀬 [Hidden Ford]	一部の河川は、選定された地点を除いて完全に渡河不能です。しばしば、浅瀬は地元住民のみに知られており、水障害を越えて友軍部隊の移動を認めることが可能でした。
19	ヘッセン・ナッサウ師団 [Hesse-Nassau Division]	戦争の際、中央ドイツの小さな2つの州ヘッセン＝カッセルとナッサウは、その旅団を連邦師団と組み合わせました。歩兵師団は2個旅団から構成され、各州から1個、両州からの支援部隊、南ドイツの州とオーストリアです。
20	皇帝猟兵 [Kaiserjager]	主にオーストリア山岳地帯のティロル地方から募集されました。これらのライフル兵は、おそらく欧州最高の軽部隊でした。
21	第8連邦軍団 [VIII Federal Corps]	ドイツ連邦の連邦軍は10個軍団から構成され、加盟州によって提供されます。オーストリアとプロイセンは各3個軍団、ザクセン、バイエルン、ハノーヴァーは各1個軍団を持ちます。10番目の軍団は、4個歩兵師団から構成される軍団で、それぞれヘッセン＝ナッサウ、ヘッセン＝ダルムシュタット、バーデン、ヴュルテンベルクから1個師団が提供されました。加えて、南ドイツ内の連邦軍要塞守備隊からのオーストリア軍部隊が軍団に付属しました。戦争中、軍団はオーストリア軍籍を退役した将校ヘッセンのアレキサンダーによって統率され、南ドイツで第二の同盟軍となりました。
22	ベルサリエリと擲弾兵 [Bersaglieri and Grenadiers]	これらは、イタリア軍の最も優秀な部隊で、サルディニア・ピエモンテ軍に連なる系譜です。この軍は高い質を持ちましたが、新たな国家軍の基幹として奉仕すべく創設されたイタリア軍旅団が割り当てられたため、その能力は薄められました。
23	ガリバルディ [Garibaldi]	1866年の戦争で、ガリバルディはヴィットーリオ・エマヌエーレ一世王によって、アルプスの麓で使用するため新たなイタリア人不正規兵部隊の徴兵を負わされました。この軍団は、ロンバルディア地方のイタリア第1軍の北側面山脈に沿って行動しました。

番号	タイトル	説明
24	ドイツ連邦がベネデックを要求 [German Allies Insist on Benedek]	オーストリアがプロイセンとイタリア両国との戦争に対して部隊を編制したとき、イタリアで行動する南方軍の司令官にベネデックが選ばれました。彼はこれらの部隊を戦前ベネツィアで統率し、キャリアの大部分を北イタリアで費やしていました。同様に、アルブレヒト大公はボヘミア地方での作戦に精通しており、北方軍を統率するのが論理的選択だったでしょう。ただし、オーストリアの南ドイツ同盟国は、アルブレヒトの代わりにベネデックを北方軍司令官に任命するよう、フランツ・ヨーゼフに大きな圧力をかけました。ベネデックは圧倒的な名声を持ち、もしもボヘミアの近隣軍がこの大将以外の誰かによって統率されるのであれば、同盟国はオーストリアとの連携から自国部隊を引き上げると脅しました。
25	ビスマルクがドイツ連邦を解消する [Bismarck Dissolves German Confederation]	6月14日、オーストリアは、ドイツ諸邦小国にプロイセンに対する動員と連邦議会の承認を要請しました。これにより、ビスマルクは、ドイツ連邦はもはや存在せず、これ以上の小国によるオーストリアへの接近は、プロイセンを害する行為であると述べました。解消前のドイツ連邦は、ドイツ語を話す諸州（スイスを除く）と、プロイセンとオーストリアが盟主である（ただし、決して支配しているわけではない）諸州の緩やかな結合体でした。ドイツ人の国家意識を鎮静化するため、1815年にウィーン条約の一環として設立され、どこを含めてどこを除外するかという領土的な広がりが見込まれていました。ルクセンブルクは含まれていましたが、大公が王であったネーデルラントは含まれませんでした。ホルシュタインは含まれましたが、ドイツ語を話す少数民族を持つシュレスヴィヒは含まれず、両地方はデンマーク王によって統治されていました（1864年になるまで）。プロイセンとオーストリアの大部分は「非ドイツ」（東プロイセンを含む）として除外されましたが、オーストリア王領地のボヘミア、モラヴィア、カリーノラ、イストリアは、その住民の大部分がドイツ語族ではなかった事実にもかかわらず含められました。それでも、1815年から解消する1866年までの期間に、連邦はドイツ人の民族意識をかなり醸成しました。
26	プロイセン軍の訓令戦術 [Prussian Auftragstaktik]	「任務命令」として翻訳されるこの概念は、従属者が将軍から達成すべき任務を与えられ、達成する詳細な方法は現地の司令官に任することを意味します。これは、プロイセン軍の将校団に驚異的な柔軟性と、指揮系統の最下層であっても主体性を発揮させることを認めました。従来の見解では、プロイセン軍は硬直体質で柔軟性に欠けるものでしたが、この戦術により大きく様変わりしました。
27	黒と黄色旅団 [Schwarzgelbe Brigade]	おそらく、オーストリア軍で最も信頼のおける部隊は、特に帝国内の中核地域で遂には1919年にオーストリアを形成したドイツ人の地方から招集された部隊でした。このカードは、大部分が古くからの歴史を持つ、これらの有力な部隊をあらわします。Schwarzgelbeの文字は「黒と黄色」を意味し、ハプスブルクの伝統色をあらわします。実際の「黒と黄色」旅団は、オーストリア北方軍の第Ⅷ軍団第3旅団でした。
28	フランスの介入 [France Intervenes]	当初、ナポレオンⅢ世は、ドイツ連邦の二大勢力間の戦争を歓迎しました。欧州の大部分と同様、彼はオーストリアの勝利に期待し、その際は戦争を終わらせて和平協定をまとめるために介入することを計画しました。彼の行動は、ライン川沿いのフランス領土の保全を正当化するでしょう。しかし、プロイセン軍の迅速な勝利は、彼の不意を突きました。皇后と外務大臣ドルアンは、軍を動員してプロイセンに対して介入するよう促しましたが、ナポレオンⅢ世はプロイセンを支援するその他の国々により、結果としてドイツが統一されると確信しました。ナポレオンⅢ世の優柔不断は、結局1871年のフランス敗北後にドイツの統一となりました。フランスは、短期間の内に軍全体の動員ができず、西部で50,000人の部隊を直ちに動員し、動員の数週間後に追加の100,000人の部隊が使用可能でした。
29	第Ⅰ予備軍団 [I Reserve Corps]	開戦後に動員された3個後備師団から成る後備軍団は、エルベ流域軍の統率下に従軍し、主としてボヘミア作戦戦域の後方地域保安を任されました。
30	第Ⅱ予備軍団 [II Reserve Corps]	開戦後に動員された軍団で、西ドイツのテューリングン地域で従軍しました。この軍団は、1個プロイセン軍歩兵師団（正規兵、後備兵、兵站大隊から構成）と、プロイセンの北ドイツ同盟国の歩兵師団を統合して編成されました。

番号	タイトル	説明
31	落伍兵の再編入 [Stragglers Rejoin Unit]	全ての軍隊における問題で、大部分の落伍兵は所属部隊からの逃亡を意図したのではなく、疲労困憊を通じて、主力部隊からの分離、移動中後方に取り残された等で部隊の管理から失われました。
32	兵站及び行軍大隊 [Depots and March Battalion]	この時代における軍隊の規範は、各連隊に兵站集積所を割り当て、兵站大隊を随行させることでした。兵站大隊は、連隊自体の補充部隊として機能し、当初、部隊と共に出征しなかった兵、新たな徴募兵、訓練中の徴募兵、連隊の野戦補充兵から編制されました。これらの補充は、上級部隊に統合吸収されるまで補充兵の指揮統率を遂行すべく計画された臨時部隊である、行軍大隊内に編成されました。このカードは、デザイン上、フランス軍とイタリア軍部隊にのみ適用します。なぜならば、ゲームにおけるその他の国家は、損耗したユニットを完全戦力にするための異なる手段を持ち、これらの国家がこのカードを使用すると、その補充率を不自然に膨れ上がらせることになるからです。
33	後備兵 [Landwehr]	後備兵は、プロイセン軍の二線級予備で、ほとんどが中年の兵士から構成され、第一線軍隊の中で闘うことを期待されていませんでした。彼らは、準訓練済の兵士たちで、必要とあらば正規兵の増援として従事できたプロイセンの奥の手でした。
34	南ドイツの予備 [South German Reserves]	オーストリアの南ドイツ同盟国は、動員後に正規兵を増強できる貴重な予備を有していました。
35	オーストリア内部の予備 [Reserves from inner Austria]	オーストリアは、帝国内に軍団又は師団内に編成されていない多数の旅団を有していました。これらの旅団は、戦闘ユニットとして又は行軍大隊と同じ要領で、存在している組織の損失を補充するために使用されました。
36	北ドイツの予備 [North German Reserves]	プロイセンのドイツ同盟国は、オーストリアよりも遥かに少なかったため、プロイセン同盟に従軍できる同盟軍ユニットの大規模な梯団は僅かでした。北ドイツ同盟軍のユニットは小規模な梯団で、しばしば存在しているプロイセン軍ユニットと一緒に「旅団化」されました。
37	プロイセン軍の将軍達は厳しい 和平を要求する [Prussian Generals Demand Harsh Peace]	ケーニヒグレーツにおけるオーストリアの敗北後、プロイセン軍の将軍たちは勝利の賜物として速やかな和平を要求しました。彼らはオーストリアが領土をプロイセンに割譲し、多額の賠償金を支払うことを期待しました。これは、いったん敗北してドイツから除外されたオーストリアと和解する、ビスマルクの全般的戦略に合致しませんでした。ビスマルクは、もしも彼の和解政策が遂行されなければ辞職すると脅し、将軍たちに対して彼が正しいことを王に認めさせました。
38	将軍の再配置 [General Replaced]	戦役中、両陣営の多数の将軍が解任されました。目ぼしいところでは、プロイセン軍のフォン・ファルケンシュタイン、オーストリア軍のクラム・ギャラス、最も有名なのがベネデック自身です。
39	不承不承の同盟国 [Reluctant Ally]	オーストリアは、全中欧のドイツ諸邦と広大な小国から支援されていましたが、国境線の外部へ攻勢作戦を行うために投入されたオーストリア同盟軍の一部では、将軍が不承不承従っていました。例えばバイエルンでは、部隊の動員が遅れてゆっくり配置されました。つまり、バイエルン国内のみでした。
40	プロイセン軍参謀 [Prussian General Staff]	プロイセンは、オーストリアとの紛争に臨むにあたり、多くの軍事的優越性を有していました。例えば、その予備役システムや「短針銃」が有名ですが、その感銘さにおいて偉大な参謀本部に勝るものではありませんでした。その戦争計画、地図作成、訓練、指揮能力は、欧州中のいかなる勢力のそれをも凌駕していました。
41	短針銃 [Needle Guns]	1840年代に発達してプロイセン陸軍が装備した「短針銃」の火力は、オーストリア軍に驚異をもたらしました。その特徴である後装式と、伏せた態勢から速射する能力の組合せは、オーストリア軍の先込め式ライフル銃を圧倒しました。短針銃の優位性は、プロイセン軍ユニット自体の評価に反映されており、このカードは戦場における奇襲要素と兵器の戦術優位性をあらわします。

番号	タイトル	説明
42、43	参謀 [General Staff]	当初、ナポレオン戦争中に発展、実施され、1866年までには多くの軍事大国が原始的な参謀システムを有していました。義務や責任は国毎に異なりましたが、共通した戦略を追求して軍隊の作戦を連携させる基本的な目的は、その存在自体がレーゾンデートルとなっていました。
44	コレラ [Cholera]	ケーニヒグレーツの戦いの後、本国からの補充兵によってボヘミアの部隊へもたらされたコレラ伝染病がプロイセン軍を悩ませました。伝染病はプロイセン軍を酷く衰えさせ、将軍たちは不明瞭で終わりの不確かな戦争を継続するよりも、ビスマルクの先導により、速やかな非懲罰的平和で終わらせることに従う気になりました。
45	リッサ [Lissa]	6月20日、強大で性能的に優れたイタリア軍艦隊が、小規模の優れたオーストリア艦隊にダルマチア沿岸沖合で敗北した無意味な海戦です。望まれたイタリア海軍の勝利は、ヴェネチアで見た陸軍の不甲斐なさを償うことを目ろんでいましたが、敗北の結果は正反対の影響をもたらしました。オーストリアは勝利からの慰めを求め、イタリア人は戦争での武勇に関して更なる不満を煽らせることになりました。
46	クラブカ将軍がハンガリー軍団を組織する [General Klapka Forms Hungarian Legion]	ハンガリー人亡命者クラブカは、ハンガリー国内で反オーストリア部隊の蜂起をすることをビスマルクからそそのかされました。その意図は、オーストリアの資源をプロイセンに対する主要な争いー特に戦争に至った場合ーから転換させることでした。この計画は、成果を上げられる前に平和が破られて瓦解しました。概して、武器としての革命の利用は、全ての関係者から嫌われましたが（クラブカを除く！）、ビスマルクがプロイセン軍の敗北を心配していた程度と、彼がそれを回避する限度をあらわしています。
47	ハンガリーの叛乱 [Hungarian Revolt]	ハンガリーは、オーストリア帝国にとって常に手におえない地方で、1848～1849年のオーストリアの統治に対する叛乱に続く混乱以来特に顕著でした。戦力の源泉であり、アキレス腱でもあるハンガリーは、オーストリアの敵にとって、ハプスブルクの人と富の源泉であるのと同様に猫の足でした。
48	側翼指揮官の任命 [Wing Commander Appointed]	両陣営は、多くの優れた（とそれほど優れていない）従属指揮官を「側翼に控えて持たせ」、多くの場合、能力が高く、より上級の司令官でした。
49	フランツ・フォン・ヨハン [Franz von John]	オーストリア南方軍の非常に優秀な参謀長で、イタリア戦域でのオーストリア軍の勝利に貢献しました。クリスマニク（彼の北方軍の対応者）よりも優秀で、ベネデックは北方軍の指揮を執るときにフォン・ヨハンを自分の参謀総長として望みましたが、ヨハンの従軍はイタリア国内に縛られました。
51	攻城砲列 [Siege Train]	全ての軍隊は、強力に要塞化された町や地方を攻撃するために様々な量の野砲を所持しましたが、攻城砲はしばしば軍の兵器庫に不可欠のものでした。もしも要塞が初期の突撃や欺瞞によって奪取されなかったら、要塞を降伏させるために激しく砲撃すべく、しばしば重攻城砲兵を持ってくる必要がありました。
53	浮橋段列 [Pontoon Train]	鉄道の出現にもかかわらず、欧州中を十字交差する水路は、この時代の軍隊にとって非常に厳しい障害でした。浮橋段列の存在（又は不在）は、しばしば水路障害に直面した軍隊に決定的な優位性を与えました。
54	戦闘は起きたのか？ [Has a Battle been fought?]	フランツ・ヨーゼフの軍事副官（de Crenneville）によって皇帝の命令に加えられた一文。国境線沿いにおける早期の敗北後、「和平締結は不可能」と指示し、ベネデックはこれを退却前に闘う要件として捉え、オーストリア北方軍はケーニヒグレーツで耐えるための舞台を整えました。全ての陣営の軍隊は、しばしば軍事作戦を君主の政策指導に適合させることを要求されました。
55	熱情と闘志 [Elan and Cran]	その高い戦意、精神力（特に攻撃で）、「闘志」（cran）、平均して長期的な熟練兵で有名なフランス軍は、おそらくこの時代の世界最高の軍隊でした。